



TITLE:

# 江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外[紀]に就て

AUTHOR(S):

鮎澤, 信太郎

---

CITATION:

鮎澤, 信太郎. 江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外[紀]に就て. 地球 1935, 24(2): 117-134

ISSUE DATE:

1935-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184469>

RIGHT:

小さな景觀の變遷に過ぎないとは言へ、嘗ては砂丘間凹地の水を湛へた池が今や紫雲英などの花咲く田圃と化してゐるのを見ると多少の感慨無きを得ない。(未完)

## 江戸時代の世界地理學史上に於ける

### 職方外紀に就て

鮎澤 信太郎

職方外記の校合彌以て御濟し被下候や、五卷目の中程に甚不埒の所相見へ候、此所はいかに御座候や、足下御本具足候はゞ少の間恩借仕度候、但し小子が本もとぞ様の紛亂にて丁に不足もなく候はゞ、足下の御本被借下候に不<sub>レ</sub>及候丁不足候はゞ御本御借可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候最も此人に奉<sub>レ</sub>願候。(林子平が藤塚知明に送つた書翰の一節……鈴木省三氏著林子平傳記三一頁……)

#### 目次

- 一、はし が き
- 二、職 方 外 紀
- 三、直接の影響
  - 1. 西川如見の華夷通商考
  - 2. 森嶋中良の紅毛雜話と萬國新話
  - 3. 山村昌永の増譯采覽異言
- 四、間接の影響
  - 1. 漢籍よりの間接影響
  - 2. 邦譯書を通じての間接影響
- 五、職方外紀輸入禁止の期間
- 六、結 語

江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外紀に就て

## 一、はしがき

我國江戸時代に於ける世界地理知識には和蘭其他西洋から直接輸入されたものと支那を介して流入したものとの二つの系統が考へられる。

前者は日本洋學史の研究の際に從來も注意されてゐるが、後者は比較的閑却されてゐる傾きがある。然しその影響は中々重大なものがある。今、こゝに、支那を介して我國に流入した世界地理書として從來多大の注意を受くべくして、餘り注意されてゐない「職方外紀」の我國世界地理學史上に及ぼした史實を調べて見度い。そして、それが江戸時代の人々の世界觀を如何に變革し、それが又明治の新時代を迎へる爲に如何なる役割を演じたかに就いてはいづれ稿を改めて論じ度い。

## 二、職方外紀

「職方外紀」は伊太利の耶蘇會士艾儒略(一五六二—一六四九)が支那に宣敎中漢譯した一種の世界地理書である。その原本となつたものはこゝで斷定は出来ないが、萬曆四十年(一六一二)の頃、閩の稅瑞が洋船から得た「萬國地海全圖」を萬曆帝に獻じ、此れを當時北京に居合せた耶蘇會士龐迪我(Didacus de Pantoja)と熊三拔(Sabathinus de Ursis)が命を奉じて漢譯し、此の草稿を更に天啓三年(一六二三)に至つて艾儒略(Giulio Aleni)が増補して出來たのが謂ふ所の「職方外紀」五卷である。<sup>(1)</sup>

(一) 然し、恩師石田幹之助先生は「前略—その後バントーハが命を奉じて西洋の輿圖を翻譯することとなつたが、成るに及ばないで世を去つたので、デユリオ・アレニ(艾儒略)がその業を繼いでこれを完成せしめた。これが「職方外紀」で、地圖と共に

世界地理の概略を記述した書物である。」（『世界文化史大系18 西洋學術の東傳』<sup>347</sup><sub>348</sub>）と記されて、パントローハの翻譯は未完成であつたとされてゐるが、明史卷九七藝文志二に龐迪我的「海外輿圖全說」二卷なる書が收録され、又「職方外紀」に附けられた奏疏に據ると、實はパントローハの「萬國圖說」は翻譯を完了して献上されてゐる。此時の草稿を増補して出来たのが「職方外紀」であるから兩者に深い關係のあるは勿論だが兩書は各々獨立したものと見なければならぬと思ふ。

猶、艾儒略の傳記及「職方外紀」の由來、内容の大略等に就いては拙稿「艾儒略の職方外紀に就いて」（『地球二三の五』）を参照せられたい。

### 三、直接の影響

#### (1) 西川如見の華夷通商考

西川如見は知らるゝ如く江戸に於ける安井算哲とほぼ同時代に長崎に在つて其の名をうたはれた天文曆算家である。然しそれにも増して、西川如見遺書に細川潤次郎氏の載せた彼の傳記に「世ニ西洋學術ノ我邦ニ傳ハリシハ新井君美ニ始マレリト謂フト雖モ如見カ西洋學術ヲ傳ヘタルハ其前ニ在リテ創闢ノ功自ラ掩フヘカラサル者ナリトス」とある如く、西洋學術輸入の先驅者として西川氏は最も注目さるべき人物である。此點から彼の西洋學術の一端である世界地理知識の經路を調べるのは興味ある問題である。

如見の世界地理の知識を覗ふ爲には「四十二國人物圖」二卷と「華夷通商考」二卷或は五卷とが挙げられよう。こゝでは其の後者が特に問題となる。「華夷通商考」二卷は始め元祿八乙亥年（一六九五）三月中旬に出版されたものである。所が此の上下二卷本に就いて如見は自ら其の「増補華夷

通商考」の作例に於いて「前書二冊誰人ノ梓ニ命ゼシ事ヲ不知、予艸稿ニシテ他ノ爲ニ所添削還テ差謬甚多ク、又轉寫魚魯ノ誤不少、今書林ノ求ニ依テ、予ガ定本ヲ出シテ是ヲ改正シ、其不足處を増益シ、且加フルニ圖畫ヲ以ス、都テ五冊、最前書ニ勝レル事遙ナリ」と云つて、彼自身はその出版に關知せざるものゝ如くに述べてゐる。そして、次に彼の自信を持ち得た「増補華夷通商考」五卷は前本と十四年を経て寶永五年（一七〇八）に刊行されたのであつた。今、元祿の二冊本と寶永の五冊本とを比較して見ると、五冊本に於いて新に増補された所は主として、其の卷之五「外夷増附録」の一卷であり、既に二卷本に載せられた條項で多くの改變を施された所は卷四「ハルシャ」「ムスカウベヤ」「インデヤ」の三である。<sup>(二)</sup>其他の記事内容は殆ど變化なく、文字が位置を多少顛倒し、又は土産の一二を附加した程度の差異に過ぎない。<sup>(三)</sup>而して、今は煩雜に陥ることを避けて一二の例を註出するに止めるが、元祿二卷本に寶永五卷本の増補する所の世界地理は全く完全に艾儒略の「職方外紀」の翻譯又は翻案であることを艾氏「職方外紀」と如見の「増補華夷通商考」とを比較することに依つて容易に知ることが出来る。<sup>(四)</sup>従つて恐らく、元祿二卷本の刊行も實は如見の手になつたものであつたが、彼は其後窃に得た「職方外紀」を讀んで先きに自分の出した著述に多くの不備を發見し、他人の僞作にこと寄せ、新に「職方外紀」を翻譯又は翻案して、前二卷本に増補を施したものではなからうかと想像される。その證據には五卷本から「職方外紀」翻譯又は翻案の記事を除けば全く増補も訂正も絶へて無くなつてしまふ。云ひ換へれば増補訂正の必要は無い筈である。然し問題の「職方外紀」は寛永七年の禁書三十二種の中に加へられ、公に讀むことは禁ぜられ

てゐる。従つて如見は「職方外紀」翻譯のことは勿論艾儒略又は職方外紀等の名稱にさへ全然ふれてゐない。けれども彼は長崎に在つて禁書等も窃に入手する便宜があつたのであらうか、やはりこの「職方外紀」と同時に禁書となつた熊三拔の「泰西水法」に就いて、彼の別著「百姓囊」卷二に「田地に水を入れる道具に、さまざまのからくり多しと見えたり、近代南蠻紅毛等の國にて用ゆる重寶の水器、唐土に傳へて甚多く、これを書集たる書に、泰西水法とやらにいひて、一冊あるよし、此以前聞及たり」(日本經濟叢書Vの一八一)と記して、その書名を擧げてゐる。そして、彼は、以前聞及んだばかりでなく、此書を見てゐる形跡は同じ「百姓囊」にも覗はれる。斯の一例に依つて見ても例へ「職方外紀」が禁書であつたとは云へ其れが如見の手に入り得る可能性は充分あると考へられる。乃ち、我國最初の世界地理書として注目される西川如見の「増補華夷通商考」に於ける支那以外の世界地理知識は正に明末、艾儒略が中國へ紹介した「職方外紀」のそれに外ならないのである。

(一) 新に附加された卷之五は全卷「職方外紀」に據つたものであるから、こゝでは元祿二卷本と同一の條項の中で新知識を多く増補された所がやはり「職方外紀」の知識に外ならないことを左の引例に依つて示さう。

(a) 「ハルシヤ」 日本ヨリ海上五千百里守護アリテ仕置ス人物モウルニ同シ。四季日本ニ同シ。

土産 ハルシヤ糸色々 ハルシヤ皮 ヘイサタラバサル 馬 甘草 蘇香油 アハントラ 巴旦杏 葡萄酒 干アドウ 乳香 花ノ水  
羊 酒色々 金入織物色々 ハナモウセン (元祿版華夷通商考下の卷三十一丁)

「ハルシヤ百爾齊亞」 日本ヨリ海上五千百里、南天竺ノ西邊也、即西天竺ノ内也ト云、此國天竺開闢ノ最初ナルヨシ、黃金ノ大塔アリ、十五里ノ外ヨリ見ユルト云、國王アリテ仕置ス、國民富饒ナル由、四季日本唐土ニ同ジ、但暖氣ナル國ナリ、人

物モウルニ同ジ、此國ノ南海ニ一島アリ、其土地悉ク鹽ト硫黃トニテ草木生ズル事ナク、鳥獸モ不<sub>レ</sub>栖、其氣候常ニ暑熱有テ地震甚多キ地也、然レドモ能湊アル故ニ、諸國往來ノ商船此湊ニ集テ、財寶富饒ナル處ノ由

土產 ハルシヤ糸 ハルシヤ革 ヘイタラバサル 乳香 甘草 蘇香油 巴旦杏 葡萄酒 乾葡萄 花ノ水 酒色々 金入織物 糸織物色々 花毛セン 馬<sup>諸國ニ</sup>勝<sup>ル</sup> 羊<sup>（寶永版増補華夷通商考卷四）</sup>

「一塔皆以黃金鑄成上頂一金剛石如胡桃光夜照十五里」

「南有島曰魯誤斯在赤道北二十七度其地悉是鹽否則硫黃之屬草木不生鳥獸絕迹」

「多地震氣候極熱」 「富商大賈多聚此地百貨駢集人烟輻輳」（いづれも職方外紀卷一百爾西亞の條）

(b) インデヤの條の土産に就いて以下三本を比較しよう。

「革之類」（元祿版華夷通商考）

「獨角獸」 此國深山ノ河水ニ毒蟲多シ、諸ノ獸敢テ先ニ飲事ナシ、ウンカウル來テ其角ヲ以テ河水ヲ攪マセテ飲テ後、諸獸皆飲<sub>レ</sub>之トゾ

象牙 獸角ノ類 革ノ類 巾著皮ノ類色々皆馬ノ如ナル獸ノ皮ナリト云

椰子 此國ノ椰子樹甚大ニシテ其用多シ、木ハ柱トシテ百年ニモ不朽、葉ハ屋ヲ覆ヒ、其實ハ食トシテ功能多ク、油ニモ煎ジ、木皮ハ船ノ綱ニ造リ、實ノ皮モ繩トシテ甚強ク不朽、實ノ殼ハ釘ニ造リテ甚ツヨシ、重寶至極ナル樹ナリ

奇怪ノ鳥獸 ウンカウルノ如キノ者多シト云（寶永版増補華夷通商考卷四インデヤの條）

「多產椰樹爲天下第一良材幹可造車舟葉可覆屋實能療飢寒能止渴又可爲酒爲醋爲油爲餡糖堅處可削爲釘殼可盛飲食」

「獨角天下最少亦最奇利未亞亦有之額間一角極能解毒此地恒有毒蛇蛇飲泉水水染其毒人獸飲之必死百獸在水次雖渴不敢飲必俟此獸來以角攪其水毒遂解百獸始就飲焉」（以上いづれも職方外紀卷一印弟亞の條）

右の如く禁を犯しての仕事であるから逐次譯せず、省略したり、順序や文章を變へたりしてゐる。尤も「職方外紀」と殆ど同文のものに南懷仁 (Ferdinand Verbiest) の「坤輿全圖」並に「坤輿圖說」があるが、これ等は江戸時代には我國へ入つてゐないらしいので、如見の場合は「職方外紀」に據つたものと見るのが自然である。然し、管見に入るものに誰一つ山村昌永が其の「増譯乘覽異言」卷之六「エジブテン」の條に「南懷仁坤輿圖說云」として引用した記事があるが之は猶研究

を要する。若し南氏の「坤輿全圖」又は「坤輿圖説」が我國に早くから入つてゐたとすれば西川如見や後述の森島中良の邦譯したのは艾氏のものか南氏のものか決定出来ないことになる。乃ちこゝで私は江戸時代の寫本等も坊間によく見ることの出来る艾氏「職方外紀」がいつれかと云へば可能性が多いので如見や中良の翻譯原本となつたものは職方外紀なりと假定して論述を進めるのである。

(二) 一例を見れば

「ベンカラ 日本ヨリ海上三千三百里 モウル國ノ手下ニテ、守護ヲ置テ仕配ス。人物モウルニ似暖國也。南天竺ノ内也。」

（元祿版華夷通商考卷之上二七丁）

「ベンガラ 撈葛 日本ヨリ海上三千三百里、モウル國ノ手下ニテ守護ヲ置テ仕配サス、南天竺ノ内ニテ暖國ナリ、人物モウル人ニ似タリ、上國也」（寶永版增補華夷通商考卷四土産を略す）

(三) 阿部貞琴氏は「江戸時代の世界地理學」（歴史學研究創刊號）に於いて「元祿八年に、長崎の西川如見は「華夷通商考」五卷を著した。」（二九頁）とされ、此書が「日本經濟叢書」第五に編入されてゐると註記してゐるが、元祿八年版は二卷本であり、「日本經濟叢書」第五に入れられたのは寶永の増補五卷本である。更に同氏は上文に續いて「彼の據り所としたのは支那人和蘭人から出た話及び支那書に過ぎず、しかも禁制であつた「職方外紀」「西方紀要」「坤輿圖説」等は見えてゐないらしい。」（二九・三〇頁）とされてゐる、が少くとも、其の中「職方外紀」だけは西川如見に依つて熟讀玩味されてゐることは明かである。

(四) 蔵田伊人氏「本邦地圖の發達」（岩波講座日本歴史二六頁）參照

(2) 森島中良の紅毛雜話と萬國新話

「職方外紀」は其後天明、寛政の頃に至り、森島中良に依つて再びとり上げられる。中良は幕府の醫官桂川甫周の弟で平賀源内に就て學び中々の秀才であつた。彼の世界地理に關する著書には「紅毛雜話」「萬國新話」等がある。「紅毛雜話」五卷は天明七年（一七八七）に刊行されたもので、その凡例の一つに「總て外國の名は明人の音譯したる文字を用ゆ、さだかならざるものは、片假字にて



書たり」(文明源流叢書第一の四五二頁)とあり、又卷之五、佛狼機の條に「明儒の譯せる萬國の圖説に云」として「ひかし佛狼機の國王類斯といふ者、如德<sup>ジュブヤ</sup>亞の地を討時、創て大銃を製す、それより後、其法を諸國に傳ふ、作り出せる國の名を負ふせて、彼大銃を佛狼機といふとも記せり、」(前掲書四八一頁)とあるが、之は艾儒略の「職方外紀」の「中古有一聖王名類斯者惡同回佔據如德亞地初興兵伐之始制大銃因其國在歐邏巴內回回遂槩稱西土人爲拂郎機而銃亦沿襲此名」(卷二拂郎察の條)と云ふ記事を採つたものであらう。其他、書中に記す「明人譯して貧院と云」とか「明人幼院と譯す」又は「明人病院と譯す」等いづれも「職方外紀」に見えてゐるので、右に引用した凡例中の明人とは艾儒略を指すのであらう。乃ち此書の中に記るされてゐる漢字の外國地名は主として「職方外紀」に據つてゐるのである。かくして森島中良は既に此頃より「職方外紀」を見てゐるのであるが、其れが一層明瞭になるのは寛政元年(一七八九)に誌して、同十二年(一八〇〇)に刊行した「萬國新話」に於てである。殊にその卷之一(殆ど全部)及び卷之四には「職方外紀」を邦譯してゐる所が多い。

中には典據を記さず「職方外紀」の記事を借用した所もあるが大概は西川如見の場合と異つて「職方外紀」を邦譯した所には「明儒譯する所の萬國圖説にいはく」又は「明人の説」或は「明人の地球圖説」と記して、少くとも漢籍に據ることを示してゐる。けれども、他の參考書に於いては相當忠實に原據を舉げてゐる森島氏が何故か「職方外紀」「艾儒略」の名稱には一度もふれてゐない。

猶こゝでは西川如見の「増補華夷通商考」の如く禁制を犯す懼れが少くなつたのか邦譯に際して

原文に前書より忠實である。

(一) 一例を舉ぐれば

(a) 「明人の説にいはく男子ハ衣を衣ず僅に尺ばかりの布をもつて膊の下を掩ひ。女人ハ布を以て首より足まで纏ふとなん。」

(森嶋中良著萬國新語卷之一の六丁)

「男子不衣衣僅以尺布掩膺下女人有以布纏首至足者」(艾儒略著職方外紀卷之一印弟亞の條)

(b) 「明儒譯する所の萬國圖説にいはく。印弟亞國中乃士農工賈ハ。皆その業を世にす國王ハ父子相繼事なし。其姊妹の子をもつて嗣となし。王の子ハ相應の職を給ふて自ら贍となり。」(萬國新語卷之一)

「國王之統例不世及以姊妹之子爲嗣親子弟給職自贍」其俗士農工賈各世其業」(いづれも職方外紀卷之一印弟亞の條)

(二) 私は不注意にも此の小論を記し終へてから、伊東多三郎學士の高説「幕末に於ける耶蘇教排撃」(歴史地理六五の三)を拜誦して大に教へられる所があつた。伊東氏は内閣文庫所藏「人見璣邑の文集」(本居宣長と尾張藩の學者人見璣邑の對話を其席に侍した門人が筆記したもの、由)に據つて『寛政四年、彼は名古屋を訪れた本居宣長の訪問を受けて、種々の事を語り合つた。その時宣長が「職方外紀を見玉ひしや」と問ふたのに對して、璣邑は「幾何原本、泰西水法、其外廿部計禁書と唱あり、職方も其一なれば、縦ひ見し人も顯に見しとは云はぬ也云々」と答へて居る。』(歴史地理六五の三の五頁)と記るされてゐる。此は寛政四年の話ださうであるから、森嶋中良の「紅毛雜話」は此年より五年前(天明七年)「萬國新話」は八年後(寛政十二年)に刊行されたのである。従つて中良も亦恐らく璣邑と同じく「職方外紀」を禁書と思つて、艾氏または外紀の名にふれることをことさら避けたのであらう。

### (3) 山村昌永の増譯采覽異言

山村昌永は土浦藩士で大槻玄澤門下の俊秀篤學の士であつた。その學は實に和漢洋に通じたが惜むらくは文化四年(一八〇七)三十八歳の壯期に世を去つた。そして此の短い彼の一生の努力はこゝに見る「増譯采覽異言」の大著に投げ込まれた觀がある。それだけに此書は江戸を通じて、我邦世

界地理書として、最も價值あるものである。

「増譯采覽異言」は享和二年（一八〇二）に刊行されたもので、もと新井白石の「采覽異言」を増補訂正したものであると云ふ所から此の名が出たことが其の序文に見えてゐるが、内容を見ると引用した書物は實に西洋三十二、漢土四十一、本朝五十三の多數に上つて、白石の「采覽異言」とは自ら獨立の姿となつてゐる。

漢土四十一の引用書目の劈頭に「坤輿全圖」「艾氏萬國圖說」「西方要記」「坤輿外紀」「遠西奇器圖說」「友論」等明末清初在支、耶蘇會士の著作が擧げられてゐる。その中こゝでは二番目の「艾氏萬國圖說」が問題となる。昌永は「増譯采覽異言」の書中に引用する際も「艾氏圖說ニ」云々「艾氏萬國圖說ニ曰」又は「艾儒略カ所譯ノ圖說」等として所謂「艾氏圖說」の記事を引用する所が多いが、「職方外紀」の書名は全巻を通じて一つも見出せない。所でこの艾氏「萬國圖說」と「職方外紀」とは同一のものか又は別本であるかを考へるのに問題を複雑にするのは艾儒略の著作目録の類坊間容易に見得るものを擧ぐるなら例へば徐宗德著す「明末清初漕輸西學之偉人」(六十八頁)松井等氏の「東洋史精粹」(二三八頁)或は「岩波西洋人名辭典」(65)等に艾氏の主要著作として、前二者の如きは「職方外紀」と並んで「坤輿圖說」と云ふのが記るされてゐることである。即ち昌永の引用する「艾氏圖說」はこの「坤輿圖說」ではなからうかと云ふ疑が起る。而も天啓三年刊行の「職方外紀」に載せた葉向高の序の終りに「此書刻于瀾中、閩人多有索者、故艾君、重梓之」云々とあつて、こゝに云ふ「職方外紀」の外に之に類したものが著はされてゐるやうであるから、其れが右

に謂ふ「坤輿圖說」かとの想像も出来る。

然し、筆者はこゝで右に謂ふ兩書は少く共山村昌永の引用する限りに於いて、同書異名であると斷じたい。何故なら「増譯采覽異言」に引用された「艾氏圖說」の記事は完全に全部「職方外紀」のそれと一致するからである。恐らく利瑪竇の、正しくは、「坤輿萬國全圖說」と云ふべきものを「地球別錄」(岡山縣立圖書館所藏)「萬國圖釋」(秋岡武次郎先生所藏)等としたのと同じ關係から此の別名が現れたのであらう。さなくば次節に見る如く「職方外紀」は禁制の故にことさら別名を用ゐられたものであらうか。

乃ち、こゝで山村昌永の引用する「艾氏圖說」は「職方外紀」であるとして見て其の影響を見よう。昌永の「増譯采覽異言」に引用されてゐる漢籍中最も多いのは所謂「艾氏萬國圖說」である。若し此書に引用せられたものを全部探出したとすれば恐らく艾儒略の「職方外紀」の原本に近いものになるかと思はれる程各項目に「職方外紀」の記事は多分に引用されてゐる。殊に「職方外紀」卷二「莫斯科未亞」の條の如きは「増譯采覽異言」卷之二に其の全文を引用されてゐる。尤も昌永に至つては「職方外紀」の所説を其儘正しいものとして引用したものばかりではなく、直接洋書を讀破してその誤りを訂正した所も少くはない。<sup>(二)</sup>然しいづれにしても十九世紀に入つて猶「職方外紀」は我國に於いて利用されてゐることは明かである。

(一) 高槻未知生氏「徳川時代に成れる邦文海外地理書解題」(三)「歴史地理一九の四」に偶々其の適例が引用されてゐるから參照せられたい。

## 四、間接の影響

前節に見た如く支氏の「職方外紀」は始め所謂禁書でありながら巧みに姿を邦文に變へて江戸時代の世界地理學史上に確固たる地歩を占めてゐる。然しそれは主として、直接及ぼした影響の現れであつた。こゝでは更に「職方外紀」の引用せられた漢籍、或は前述の邦譯本等に依つて與へられる間接の影響はより一層廣汎なもの、あることを見る事が出來よう。

## (1) 漢籍よりの間接影響

新井白石は上述の西川如見と又同時代の碩學であり、かの有名なる「西洋紀聞」は西川氏の「增補華夷通商考」の出た翌、寶永六年（一七〇九）に刊行され、更にそれから三年を経て正徳二年（一七一三）に「采覽異言」が著はされてゐる。如見の支那以外の世界地理知識が主として「職方外紀」に據つてゐるのに對して、白石のそれは利瑪竇の「坤輿萬國全圖」に負ふ所が多く、「職方外紀」を全く見てゐないのは面白い對象である。然し白石は「采覽異言」の中に「物理小識」の文を引用して「其説曰。把勒魚。長數十丈。首有二大孔。噴水上出。淺處得之。熬油可數千斤。」（新井白石全集第四の八二六頁）と記してゐるが、この「物理小識」と云ふ書は康熙三年（一六六四）に記した序文を持つ所から推して、恐らく、この頃に刊行せられたものであらう。一種の百科全書の體裁を備へたものである。此書には「外紀言」とし、又は據る所を記るさずして「職方外紀」の記事を引用する所が多い。偶々新井白石の引用した前文は其れに續いて「又有劍魚、背長丈許。有齧刻如

鋸。能與把勒亞魚戰而勝。又有二手二足之海魔、舶最畏之。其大如島者。所謂鰲身映天黑也。<sup>(三)</sup>（卷之十一の七）とある所で、如何なる書に據つたか記してはないが、これは正しく「職方外紀」卷五海族の條を引用したものであり、西川如見も丁度此の記事を「増補華夷通商考」卷五併記（日本經濟叢書卷五の三一頁）に翻譯してゐる。乃ち、白石は例へ「職方外紀」を直接見てゐないにしろ、此の「物理小識」を見ることは「職方外紀」の一部を見たと同じ結果となるから、新井白石も亦間接ながら「職方外紀」の影響を受けてゐると云ふことが出來よう。

次に、白石の「采覽異言」とは世紀をかへて、十九世紀も半ばに入つて刊行された「海國圖誌」に就いて見よう。

「海國圖誌」は有名な阿片戰爭の中心人物林則徐が押寄せる西力の何物なるかを尋ねる爲に洋書を翻譯し、此れを更に魏源が重輯し道光二十二年（一八四二）に刊行したもので、此頃、漢文で書かれた世界地理書としては最も完備したものである。此書の編輯を餘儀無くせられた支那と同じ運命は幕末の我國にもふりかゝつて來た。その爲に「海國圖誌」は直ちに我國に入つて、幕末の先覺者に世界地理の知識を與へ、支那に於けると同じ役目を果たしたのであつた。そして遂に嘉永七年（安政元年一八五四）には川路聖謨の命に依り鹽谷宕陰、箕作阮甫等が此書を翻刻するに至つた。此の間の事情に就いては尾佐竹猛博士の「近世日本の國際觀念の發達」（現代史學大系五）第四章世界地理書の普及（五一頁—五九頁）に詳論されてゐるから參考せられたい。

此の幕末我國人の世界知識に資する所の多大であつた「海國圖誌」（特に宕陰訓點本に據る）を一

瞥すると卷四十三南墨利加洲内に智利、孛露、金加西臘、伯西爾、智加等の諸國を擧げて、「以上皆南洲内各國皆據職方外紀補入」とあり、又、北墨利加洲の卷には墨西科國、北墨利加洲西方三國、同じく西南四國、西北土蠻等に就いて「以上四處皆原本無。今據職方外紀補入」とあり、其他亞米利加洲の諸項目に於いて魏源が林則徐の原本に増補した所は殆ど艾儒略の「職方外紀」に盡きてゐることを知り得る。併も、此の亞米利加洲に就いて林則徐の漢譯したものは僅かばかりの記事であるから、魏源の重輯に係る「海國圖誌」の亞米利加の知識は大方「職方外紀」の其れであると云ふことが出来る。併も亦、偶々我國で鹽谷宕陰に依つて訓點を施された「海國圖誌」は此の亞米利加の部五冊が劈頭第一に刊行されたのであつた。

乃ち、「職方外紀」は間接ながら危機を孕んだ幕末の人士に海外知識を與へる爲に切實なる影響を及ぼしてゐるのである。

(一) 藤田元春先生「新井白石と利瑪竇」(史材一六の二) 參照

(二) 「〇又一魚アリ、其嘴ノ長キ事一丈、齒ハ鋸ノ如ク、力強ク猛シ、諸大魚ト戰テ必ズ勝」  
「〇又有海獸二足二手、船ニ遇トキハ船ニ附テ顛倒搖動セシム、多ク没溺ニ遭モノアリ、最多力猛惡ナル者也、海船是ヲ海魔ト號ス」(增補華夷通商考卷五)

「一名劍魚其嘴長丈許有齧刻如鋸」中略「能與把勒亞魚戰海水皆紅此魚輒勝」  
「又有一獸二手二足氣力猛甚遇海船輒顛倒播弄之多遭沒溺西船稱爲海魔」(職方外紀卷五)

(三) 新井白石が「采覽異言」に「物理小識」から引用した記事は描稿「艾儒略の職方外紀に就いて」(地球二十三の五)の中に如見の譯文に並べて「職方外紀」の原文を註記して置いたのでこゝには其れを略す。

## (2) 邦譯書を通じての間接影響

不思議にも新井白石は「増補華夷通商考」を見てゐないやうであるが、凡そ江戸時代を通じてか  
りそめにも世界地理の知識を得ようとする者は必ず最も重要な参考書の一として如見の「華夷通  
商考」はとり上げられる。

安永三年（一七七四）に記るされた西村遠里の「萬國夢物語」など其の凡例の第一に「凡所不載于  
采覽異言者迺以萬國圖釋華夷通商考等之書補之而綴焉」とあり、白石の「采覽異言」と並び行はれ  
てゐる。前に見た森島中良の「萬國新話」にも山村昌永の「増譯采覽異言」にも、近くは嘉永六年  
（一八五二）大學頭林緯の編した「通航一覽」に至るまで重要な参考書となつてゐる。

後節に見ようとする山片蟠桃の「夢之代」には其の引用書目に偶々如見の「華夷通商考」が見え  
ないが、其の代りに森島中良の「萬國新話」「紅毛雜話」が載せられてゐる。

「職方外紀」に對する關係に於ける限り、山片蟠桃が森島氏の此等の書を見ることは又西川如見の  
「華夷通商考」を見ると同様の結果を生ずるであらう。かゝる證據を江戸時代の世界地理に關する書  
物に一々求めたなら恐らく容易に終りを知らないであらう。そして、此等の諸書を通じて「職方  
外紀」の一脈が常に流れつづけてゐる。それは、我國の社會發展が「職方外紀」の原本となる世界  
圖を生んだ當時の西洋の社會狀勢と同様の段階に進むまで生命を保ち、また指導的位置を保つたで  
あらう。

（二）「嘉良喜隨筆」（刊行年月不詳）に「西川求林齋萬物怪異辨談、日本水土考、華夷通商考、夜話草、天文書以下數品ヲ顯ス。  
（中略）。通商考ハ大清十五省ノ圖添テ重寶ノ書也」（日本隨筆大成十一卷の一七頁）とある。



## 五、職方外紀輸入禁止の期間

既に見た如く、「職方外紀」は改めて、輸入禁止を解除されるまでもなく、我國江戸時代の世界地理學史上に重要な役割を演じてゐるが、何時の頃から公然その姿を現し得るやうになつたか、此れに就いて相矛盾する史料があるので次に卑見を述べて餘祿としたい。

「地球」(二三の五)の拙稿に記したやうに「職方外紀」は近藤正齋の「好事故事」卷七四に依ると正齋は「長崎ノ書物改メ舊記ニ云トコロ左ノ如シ」として「職方外紀享保十六丑年唐船持渡候皇明職方地圖之内に有之商賣被仰付候」(近藤正齋全集第三の二一八頁)と記し、此時に禁を解かれたものと考へられる。所が、享和二年(一八〇二)山片蟠桃の著に係る「夢之代」卷之二地理第二に「渾天ノ説尙シト雖、地球ノ説亦更ニ新也、地天中ニ浮ムノ説尙シト雖、四方人居ノ説亦更ニ新也、唐宋以來月食ノ地影ニ掩ハル、コトヲシルトイヘドモ、四方人居ノ説イマダシラズ、明ノ崇禎ノ時崇禎  
曆書利瑪竇ト云者來リテ曆書ヲ譯ス、ソレヨリ天經或問出デ、後地球ノ四方ニ人ヲ立セテ、外面ミナ上ニシテ、四方六合皆人ノ立タルヲシルス、職方外紀史ノ書アリテ、圖說トイヘドモ本圖アルコトナルベシ、サレドモ國禁ナルユエシルコトナシ、新井氏采覽異言ヲ作ル此書ニ因ナラン、コレヨリ萬國ノ事明ラカナリ、ソレマデノコトハミナ妄説ナリ」云々(日本經濟大典第三七の一二五頁)とあり、これに據れば享和二年(一八〇二)には未だ國禁とされてゐる。

次に前に見た如く此と同年即ち「享和壬戌之冬」の日附の序文を持つ山村昌永の「増譯采覽異言」

に於いては終始「艾氏萬國圖說」又は「艾氏圖說」等として「職方外紀」と同一の文章を引用してゐる。次に文政八年（一八二五）前後の記述とされる「松屋筆記」卷六十一の（四十二）「西方要紀小引五大洲及路程」の條に「利瑪竇が職方外紀に合考べき書也」とあり、頗る博學を以て知られる松屋高田が著者を利瑪竇に間違へてはゐるが、「職方外紀」の名を明瞭にしてゐる。それが更に降つて天保九年（一八三八）に至り、渡邊華山の「慎機論」には「波羅泥亞は、職方外紀、坤輿圖說諸書に見えたる國にて」（大日本思想全集一三ノ三三〇）云々とあり、其書ははゞかる所なく記るされる。そこで以上舉げた資料に據り、大體次の様なことが考へられよう。

即ち、享保十六年、長崎に持參された時には特別此の分だけ買上げを許されたのであつて、其後と云へども一般には禁を解かれたことは分つてゐなかつたのではなからうか。

森島中良が「職方外紀」を邦譯しながら其の名を舉げず、山片蟠桃は國禁なる故を以て知ることの出来ない由を述べ、山村昌永は亦艾氏「萬國圖說」として、「職方外紀」としなかつたのは其の爲ではなからうか。それが松屋高田に至つて漸く著者を間違へながらも「職方外紀」の名が明かに擧げられ、渡邊華山に至れば「職方外紀」を讀んだことを明言する。これは漸く此所謂幕末の頃になつて其れが國禁の書でないことが確になつて來たことを物語るものではなからうか。

（二）前掲伊東氏は又禁書の解除に就いて「この解禁は一般には公示せられず、單に關係當局の默認の形式に依つて行はれたものであるから、解禁書も一般の人にとっては従前の如く禁書として考へられ、輸入も殆ど見られなかつたやうである。」（歴史地理六五の三の三頁）と述べられ、こゝでも私の推論に對して多大の援助を與へられる。記して謝意を表する次第である。

## 六、結 語

以上、江戸時代世界地理學史上の「職方外紀」に就いて記述したが、齋藤正謙がその「鐵研齋輶軒書目」に「職方外紀」を解説して「明末所撰明清人説五大洲、本據此書、世多有之、故不須余縷述。」（文明源流叢書第三の四八三）などと云つてゐる所から見れば、淺學なる筆者の管見の及ばざる所に、或は又、非才の故に洞察の届かざる所に直接、間接の影響がまだまだ少くはなからう。本稿は前掲拙稿（地球二三の五）と重複する所もあるが、此れと合せて諸賢の御叱正を得ることが出来れば幸である。

（一九三五・六・一）

附記（前稿「艾儒略の職方外紀に就いて」の訂正

（一）「地球」二三の五の三〇頁「續いて鞭而鞭、回回、印弟亞、一中略—瓜哇、渤泥、呂宋、馬路古、地中海諸島の地理を記してゐる」（三一頁の二行、「間違ひであらう。」までを）と訂正

（二）同三五頁註（二）の「鶴島常之」を「鶴島常欲食之」と訂正